

日韓国交正常化50周年記念事業の参加を通して

—— 歌声は国境を越えて ——

前ソウル日本人学校 教諭

福島県田村市立滝根小学校 教諭 亀井 義弘

キーワード：日韓合同事業、文化交流、現地理解

1. はじめに

私が韓国に派遣されていた2015年度に、「日韓国交正常化50周年」を迎えた。その記念すべき年に、児童レベルでの文化交流はできないかと在大韓民国日本国大使館からの打診があり、このプロジェクトがスタートした。

ところで、一般的な両国の関係はどうだろうか。日本と韓国は国交正常化当時には1万人規模の交流であったが、現在は500万人規模以上に拡大し、お互いが密接な関係にある。また、「K-POP」や「韓流ドラマ」が日本で世代を問わず広く受け入れられたり、韓国においても日本のアニメや漫画が注目を浴びたりして文化的な結びつきは強いといえよう。

しかし、隣国でありながら過去の歴史的問題や領土問題などのトラブルについて報道されることも多く、複雑な関係であるのも事実である。慰安婦像に関わること、大使館の移転問題など、細かな話題は連日韓国でも報道されていて、日本への関心は高い。ところが、実際にソウルで生活してみると、確かに反日感情が残っている部分はあるものの、日本人に親切的な韓国の方も非常に多くおり、私自身に全く不満はなく逆に好意的な態度に感謝の気持ちで一杯である。

ここでは、児童レベルでの文化交流事業の一環として、ソウル日本人学校とソウル市少年少女合唱団とで合同合唱団を組織し、様々な場で披露するに至った経緯とその取り組みについて紹介したい。

2. 実現に向けての取り組み

(1) メンバー編成

ソウル日本人学校では、もともと合唱部などの組織を持たないため小学部5・6年生の児童を中心に募集をかけたところ、33名の参加希望があった。合唱に関しては未経験の児童が多い日本人学校に対して、韓国側は海外遠征などの経験もあるソウル市少年少女合唱団を推薦してきた。あまりの実力・実績の違いに不安な思いがしたが、意欲があり歌うことが大好きな日本人学校の子供達の熱意にはすばらしいものがあった。

(2) 曲目の選定と練習での苦勞

両国に伝わる童謡から2曲ずつ、さらに合同で歌うことのできる曲目を1つということで選定に入った。ソウル市少年少女合唱団の指揮者・伴奏者、本校の音楽専科講師・管理職を中心に話し合いを重ねた結果、以下の5曲に決定した。

- ① ふるさと（日本）
- ② 故郷の春（韓国）
- ③ 青い心、白い心（韓国）
- ④ おもちゃのチャチャチャ（日本）
- ⑤ Together（日韓合同）

全ての曲を日本語と韓国語の両言語で披露できるように準備することで合意した。その後、子供達にすぐに楽譜を渡し、特に韓国語で歌うための練習に力を入れて取り組んだ。具体的には本校の音楽専科講師の来校日に合わせて、週に3～4日、1時間程度ではあったが練習時間を確保し準備をすることになった。意欲的な子供達は

メキメキ上達していったが、ソウル日本人学校では児童生徒の約80%がバス通学をしているため、その出発時刻までの短い時間を活用・運用しての練習には苦慮した。

さらに、この時期韓国内で大きな社会問題が生じたため、このプロジェクト自体がなくなってしまうのではないかと危惧された。その問題というのが、「MERS コロナウイルス」の流行である。5月から始まったこの問題は、韓国内で死者30名以上、隔離患者15,000人を超える大きな懸案事項となった。ソウル市内の学校も休校措置が取られている中で、本校合唱団の保護者も不安を感じており、その対策が急務であった。ソウル市教育庁の対策本部や在大韓民国日本国大使館とも連携を図りながら、その不安感の解消に努めた。具体的には、日本から感染症の専門医をお招きし、本校の保護者を対象に講演していただき、感染力はインフルエンザと比べるととても低いことや消毒液で死滅する弱いウイルスであることなどを周知していただいた。本校でも、検温・適度な湿度・マスク・消毒液の確保などの対策を進め、徐々に保護者の安心感と理解度は高まっていった。

(3) 合同顔合わせ・合同練習

様々な問題が生じたものの、いよいよ5月に初顔合わせの場を設けることになった。場所は、世宗文化会館(市庁)にあるソウル市少年少女合唱団の練習所であった。本番の日にお世話になる指揮者と伴奏者を迎え、最初は緊張の面持ちの本校児童であったが、お互いの言語を使いながら自己紹介をしたり声を合わせたりしながら徐々に打ち解けていった。

子供達に会話の内容を尋ねると、「メンバーの〇〇さんとメールアドレスを交換したよ」「学校では、何が流行っているの?」「日本人学校ってどんな学校なの?」など、ありきたりではあるが普通の小学生らしい意見交換をしたとのことである。このような練習の機会を、発表日までに3回ほど設け、お互いのハーモニーを創りあげていった。回数を重ねるほどにその完成度は増し、いよいよ本番の日を迎えることになった。



合同練習会の様子

3. 発表の場について

(1) 韓日経済人会議レセプション

第1回目の発表は、5月に行われた「韓日経済人会議」のレセプションの場であった。この会議は、民間の経済交流の場で経団連、日本商工会議所が中心となって開催されたものである。そのレセプションのオープニングの場での発表となった。ロッテホテルソウルで開催されたこの会には、300名を超える日韓の政財界の来賓が招待されており、その前での披露であること、また子供達も大きなステージ発表が初めてとのことであって、伝わってくる緊張感は大きいものであった。

しかし、このような大きな場に慣れているソウル市少年少女合唱団のメンバーに上手くリードしてもらい、リハーサルが終わるころには、いつもの伸び伸びとした歌声が響くようになった。本番では、笑顔いっぱいの歌声が会場に広がって多くの方を魅了するとともに、お互いの国の童謡を互いの母国語で歌ったこともあって、友好・友愛のムードは広がったように感じた。参加された企業関係者から大きな賞賛を得て、大成功といえるすばらしい発表であった。この出来事は各種メディアにも取り上げられ、子供達もよい緊張感のもと、貴重な体験をすることができた。また、この発表後には合同夕食会も設けられ、韓国らしく焼肉を食べながらさらに親睦を深めていった。

(2) 日韓国交正常化50周年祝賀行事

第2回目は、6月に行われた「日韓国交正常化50周年祝賀行事」での合唱披露であった。この行事は、50年前に締結された日韓基本条約調印を記念し、日本と韓国の双方で同時に開催されたものである。ウエスティン朝鮮ホテルで開催された式典には朴槿恵（パク・クネ）大統領も出席し、和やかなムードの中、盛大なものであった。大統領との交流とまではいかなかったものの、子供達からは「まるで日本代表だね」「たくさんカメラとフラッシュでびっくりしたよ」「テレビでみたことある人がたくさんいたよ」など興奮冷めやらぬ感想を聞くことができた。



日韓国交正常化50周年祝賀行事の様子

この様子は、韓国内のテレビや新聞などでも取り上げられ、両国の今後の友好関係は次の世代も続くなどの言葉とともに、広く取り上げられた。特に、最後に披露した‘Together’はその歌詞の意味合いからも各方面で絶賛された。

(3) 日韓交流おまつり

第3回目は、9月に開催された「日韓交流おまつり」の場であった。このイベントは、2005年の日韓国交正常化40周年を記念して「日韓友情年」に始まり、それ以降両国の友好関係の増進を目的に開催されている、日韓最大の民間交流行事である。COEX（ソウルのショッピングセンター）をメイン会場に2日間にわたって開催され、昨年度実績で約50,000名の観客数を記録しているため、交流行事としてはまさしく最大級のものといえる。過去2回の合唱披露が各方面に評価され、今回は招待ということで、本校中学部も参加することになったこのイベントは、お揃いのTシャツなども作っていただき、思い出に残る発表となった。

また、前回まではセキュリティーの関係で、友達や保護者の方々も観ることができなかったが、今回は会場が広くオープン化されていたため、その発表の様子をじっくりと観ていただくことができた。合唱に参加した児童からは、「今日は兄弟も観に来たんだよ」「いっぱい写真を撮ってもらってうれしい」などたくさんの人に観ていただいた喜びを聞くことができた。ソウル市少年少女合唱団とのコラボレーションも3回目を迎え、まさに息もピッタリで聴いている人を惹きつける素晴らしい合唱であった。その後、日本や韓国を紹介する様々な展示ブースが開設され、友達と一緒に見学する児童の姿も多く見られた。

(4) 日・中・韓3カ国首脳会談

第4回目は、急遽開催が決定した「日・中・韓3カ国首脳会談」の場である。これは、その当時約3年半ぶりに開催されたサミットであり、日本の安倍晋三首相、韓国の朴槿恵大統領、中国の李克強首相によるトップ会談の歓迎晩餐会のオープニングの場であった。国立現代美術館という会場の規模によるセキュリティーと3カ国の児童を集める関係上、5年生の5名に限定することになったが、事前にレコーディングをして衣装合わせをするなど、準備期間は短かったものの入念な打ち合わせを何回も行なった。

歴史認識の違いから日本と中韓が応酬を繰り返したり、韓国側でそれぞれの国との会談で緊張が生じたりしたとのニュースがリアルタイムで入り、各首脳の面持ちが硬い印象を受けたが、子供達の合唱を聴きその表情も和らいだとのことである。過去、様々な場で発表してきた子供達であったが、「今までで一番緊張した」「ステージとテーブルが近くて、聴いている人の表情がよく分かったよ」などの感想を聞いた。国立現代美術館ソウル館で開催されたこの会であったが、さすがにセキュリティーが一番厳しく、引率者の私達も入場制限があり、実際の童謡披露の様子を観ることができなかったのはとても残念であった。

4. おわりに

今回のソウル日本人学校とソウル市少年少女合唱団のコラボレーションによって、児童はかけがえのない体験をすることができたと思う。「歌で聴いている人に喜びと感動を届けるんだよ」。これは、毎回合同練習のたびに指揮者の先生がおっしゃっていた言葉である。「そのためには、歌の上手さも大切だけど態度や表情も大事なんだよ」ともよく子供達に話されていた。まさしく、その通りであると思う。最初はお互いにぎこちない雰囲気の子供達であったが、合同練習を重ねるについてお互いの言語をそれまでに練習し合い、身振り手振りでコミュニケーションをとる様子に、今後の日本と韓国のあるべき姿が見えたように感じた。態度や表情は、実際に会って見ないと分からないものである。与えられた情報のみの先入観で物事を判断するのは、非常に誤ったものの方であることを子供達に教えられたような気がする。

私自身、この時は教務主任という立場で、各種団体との交渉役や校内での調整役として貴重な体験をすることができた。様々な人と出会い、そしてつながることができたのは今後の大きな財産といえよう。また、この当時合唱団にいた子供達は私がかつて担任していた教え子達でもある。その子供達に人につながることの尊さを改めて教えてもらったようにも思う。一緒に時間を過ごし、合唱に携わった日本と韓国の方々の双方の笑顔が見られたことに大きな喜びを感じた。この思いや気持ちは、必ず次につながるものと考えられる。これからの教員生活において、私自身が相手の立場に寄り添うという思いやりの気持ちを忘れなければ、この体験は、今後出会う様々な人達に通じるのではないだろうか。そして、「歌声は国境を越えて」人につながるができるということをもっと実感できる体験であった。最後に、この合唱の実現に向けて動いてくださったソウル日本人学校の先生方をはじめ、在大韓民国日本国大使館公報文化院の皆様、さらに関わりのあった全ての人に改めて感謝を申し上げたい。